

あとがき

この執筆を機会に銀閣寺道以西の疏水分線をじっくり歩いた。「哲学の道」には慣れ親しんでいたが、賀茂川までの全行程は断片的にしか知らなかった。若かりし頃と違って水路端は緑で覆いつくされていた。疏水分線自体は人工物だが、石組壁面には野草が茂りコンクリート部分にも苔が生え緑の並木が続く景観は、やさしい水の流れと相まって極めて良好な都会の親水空間を作っていた。それに続く紫明通からの堀川も、水辺環境整備事業により緑豊かなプロムナードに変わっていた。

それに比べて天神川、有栖川河畔はまだ整備半ばである。平安京以来の左京重視が現代の京都市の都市整備にも何かしら反映されているように思われる。しかし、鷹峯からきぬかけの道、広沢・大沢池辺りは緑も多く、古都の風情を十分感じさせてくれる。水辺と一体化したまちづくりを期待したい。

最後に、本会員の海老瀬潜一氏には北山・嵯峨野の川歩きをはじめ執筆への協力をいただいた。また、京都府文化環境部環境・エネルギー局の白川まりな氏には天神川、有栖川の水質データ閲覧の便宜を図っていただいた。記して謝意を表します。

(公社)日本水環境学会関西支部川部会／古武家善成

参考文献

- ・秋山 虔監修(2013)週刊絵巻で楽しむ源氏物語五十四帖60, 36pp., 朝日新聞出版, 東京.
- ・海老瀬潜一(2014)統関西の川歩きNo.9 京都北山の川歩き 一大覚寺大沢池から金閣寺鏡湖池まで一, 環境技術, **43(1)**, 50-52.
- ・河角龍典(2009)平安京の環境史, 環境技術, **38(2)**, 82-88.
- ・河野仁昭(2000)京の川 一文学と歴史を歩く一, 269pp., 白川書院, 京都.
- ・京都市建設局水と緑環境部河川課(2003)京都市河川課広報誌 水鏡, 63pp..
- ・京都市生涯学習振興財団(2008)平安京図会(改訂版).
- ・京都市上下水道局水道部疏水事務所(2009)琵琶湖疏水(改訂版), 28pp..
- ・京都埋蔵文化財研究所監修(2008)源氏物語千年記念出版 紫式部の生きた京都, 45pp., ユニプラン, 京都.
- ・古武家善成(2009)関西の川歩きNo.34 疏水分線 一碩学の徒が思索し歩いた哲学の道一, 環境技術, **38(6)**, 433-435.

既刊の紹介

- ・源流を行く編 『名張川』(2013)『木津川上流』(2013)『高時川・余呉湖』(2014)
- ・おうみの川編 『赤野井湾と流入河川』(2013)
- ・みやびな川編 『白川』(2010)『鴨川・明神川』(2012)『琵琶湖疏水』(2013)
- ・歴史とロマンの川編 『瀬田川・宇治川』(2010)『保津川・桂川』(2011)『茶川』(2011)『猪名川』(2013)
- ・なにわの川・庶民の川編 『東横堀川・道頓堀川』(2011)『恩智川・生駒の川』(2012)『中河内の川』(2013)『大川と大阪市内河川』(2013)

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構
〈企画編集〉(公社)日本水環境学会関西支部川部会
(一社)近畿建設協会

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる
～ちょっと大人の散策ブック～ 〈みやびな川編〉

京の川 (Kyonokawa)

〔発行〕平成26年3月
〔発行者〕公益財団法人 琵琶湖・淀川水質保全機構
〒540-0008 大阪市中央区大手前1-2-15 (大手前センタービル4F)
TEL. 06(6920)3035 FAX. 06(6920)3036
<ホームページ> <http://www.byq.or.jp/>
* 散策ブックはホームページ上で閲覧することができます*
©BYQ, 2014 Printed in Japan

「 飲める水 遊べる水辺 次世代に 」

琵琶湖・淀川 里の川をめぐる

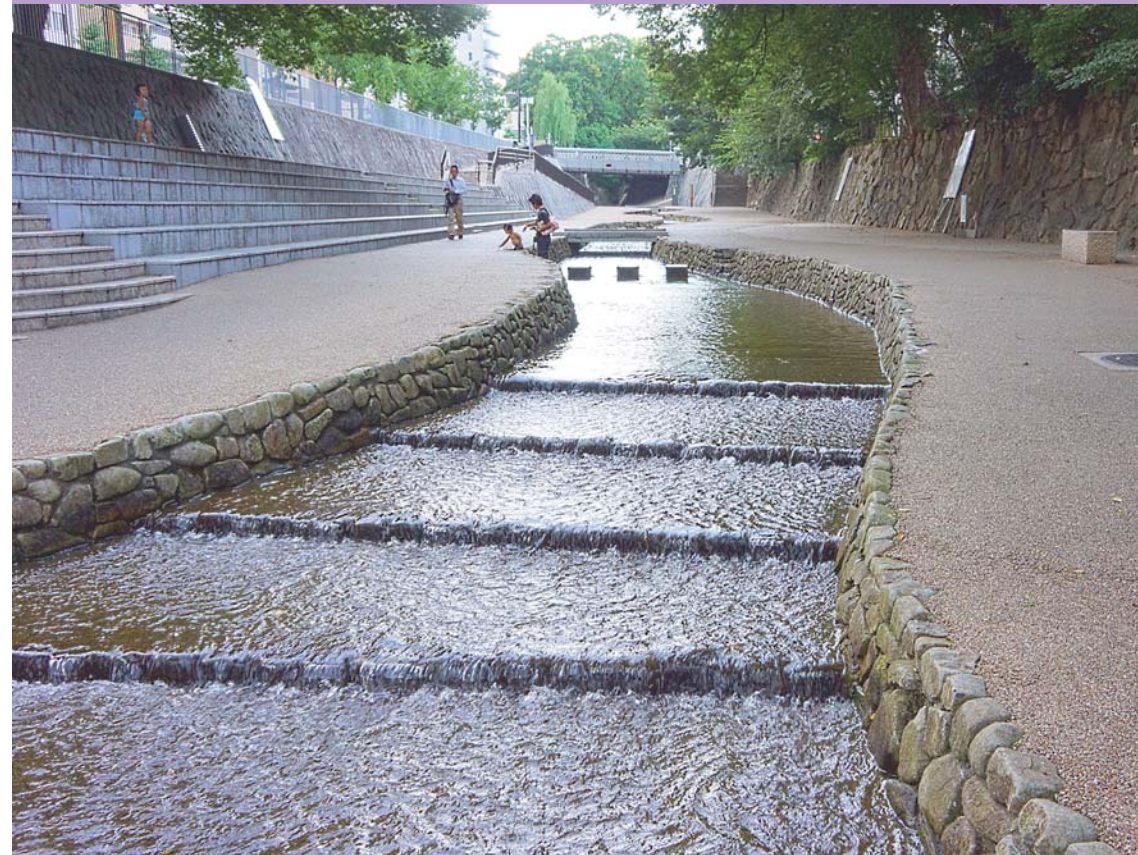
～ちょっと大人の散策ブック～

みやびな川 編

京の川

(Kyonokawa)

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構
(公社)日本水環境学会関西支部川部会
(一社)近畿建設協会



「琵琶湖・淀川流域散策ブック」のねらい

(公財)琵琶湖・淀川水質保全機構と(公社)日本水環境学会関西支部川部会、(一社)近畿建設協会は、大都市圏の川を水質という側面だけではなく総合的に把握し、その機能を再評価するために川部会が2001年より行ってきた活動の成果を基礎に、「琵琶湖・淀川流域散策ブック」をまとめることになった。

この散策ブックは、琵琶湖・淀川流域の河川を散策する時に気軽に携帯できるガイドブックを意図して作られており、対象河川の概要はもとより、流域の見どころ、名水や滝、水質や生物、その川にまつわる興味深い話などが、豊富な写真や地図を用いて解説されている。

散策ブック全体は、「源流を行く」、「おうみの川」、「みやびな川」、「歴史とロマンの川」、「なにわの川・庶民の川」の5編で構成され、それぞれ5、6リーフレットからなる。本リーフレットでは、みやびな川編として、「哲学の道」で有名な疏水分線と整備事業で蘇った堀川（左京・上京）、および平安のいにしえから流れる天神川と有栖川（右京）を取り上げた。

本ブックシリーズが、琵琶湖・淀川流域の河川に親しみを感じ、流域を散策するための一助になることを願っている。

目次

ねらい・目次

京の川—疏水分線・堀川・天神川・有栖川—の概要	02
疏水分線	03
コラム1 作庭家 小川治兵衛	06
堀川 賀茂川河畔から二条城まで	07
コラム2 平安京大内裏と寝殿	10
天神川・有栖川	11
コラム3 天神川・有栖川の水質	12
コラム4 源氏物語と嵯峨野	14

CONTENTS

1 京の川—疏水分線・堀川・天神川・有栖川—の概要

京都市内の中小河川は200以上あるが、その中で地域の水辺環境として重要な疏水分線、堀川、天神川、有栖川を、「京の川」として紹介する。疏水分線は水路だが、京都の中心で良好な水辺環境を提供している琵琶湖疏水の一部として取り上げた。

疏水分線は琵琶湖疏水の分岐路で、第1疏水竣工と同じ1890年に完成した。建設当初は蹴上で琵琶湖疏水から北流後、高野川、賀茂川の下をサイフォン方式で西行し、現在の紫明通小川まで8.4kmを流れていた。しかしその後サイフォンは使われなくなり、現在では、行政管理上の分類である疏水分線(蹴上～志賀越道)と第1疏水分線(～高野川河畔)の水は高野川に、小河川水や雨水を集めた第2疏水分線(～賀茂川河畔)水は賀茂川に流入し、これ以西は疏水分線でなくなった。

堀川も、1200年前の平安京造営時の木

材運搬を目的とし、船岡山東麓の小河川を改修して当時の堀川小路に開削された。明治期に疏水分線が紫明通小川まで伸びると、堀川は分線水により涵養されるようになった。しかし、洪水が頻発したことから賀茂川以西の勾配が逆にされ、分線は下水処理水等の放流路と化した。現在は、紫明通の東端から二条城まで河道が整備され、サイフォンの再作動により賀茂川の下を通った第2疏水分線水がせせらぎを形成している。その後は暗渠で市南部の鴨川に流入する。

天神川は右京区鳴滝の沢山東麓を源流に鷹峯台地北部を回って南下後西行し、御室川と合流後南流して吉祥院公園付近で桂川に流入する。北野天満宮付近より上流は紙屋川と通称される。有栖川は右京区嵯峨観空寺谷を源流に大覚寺付近から嵯峨野を南東方向に流下し、右京区の梅津で桂川に流入する。



京の川流域図

(表紙写真／一条戻橋付近の堀川)

2 疏水分線

琵琶湖疏水は、東京遷都により沈滞した京都の社会的経済的活力の復興を目的に、琵琶湖南湖西岸から京都市へ湖水を導入するため、第3代京都府知事北垣國道によって計画された。その分岐水路である**疏水分線**は、復興を京都市北部まで拡大するために、水力利用、灌漑、防火用水などを目的に東山山麓沿いに北方に建設された。

疏水分岐後に**南禅寺**があり、境内に分線を通すために、全長93m、高さ約10mのレンガ造り半円アーチ式水路橋「**水路閣**」が1888年に建設された。琵琶湖疏水工事全体を担当した土木技術者田邊朔郎の設計である。当時は反対があった赤レンガの水路閣も、100年以上の歳月を経て境内の景色に溶け込んでいる。1983年に京都市指定史跡、1996年には国史跡に指定された(みやびな川編「琵琶湖疏水」参照)。



南禅寺水路閣



熊野若王子神社



銀閣寺道



疏水分線・哲学の道



志賀越道までの疏水分線



京大吉田キャンパス北部構内



湯川記念館（基礎物理学研究所）



湯川博士像



北白川邸宅街



疏水分線はここから**銀閣寺道**付近まで西方を流れる**白川**と並流するが、流下方向は白川と逆の北向きである。北大路通と京都駅との標高差が約40mあることに示されるように、北高南低の地形から市内を流れる全ての河川は南流するが、疏水分線は唯一北流するように人為的に造られた。

南禅寺北には**熊野若王子神社**が鎮座し、その近くに**松ヶ崎浄水場若王子取水池**がある。分岐後2つのトンネルを通った疏水分線はここより開渠となり、銀閣寺道までの1.5kmの区間には「**哲学の道**」と呼ばれる小径が分線沿いに続く。「哲学の道」の名前は、京大の哲学の教授であった西田幾多郎が、思索にふけりながら散策したこと由来と言われていた。「哲学の道」は、かつては野草が生い茂っていたが、1970年代初めより整備が進んだ。松ヶ崎浄水場への送水は分線の下に埋設された導水管によって行われるようになり、分線は幅、深さも縮小した。「哲学の道」は1986年に建設省(当時)制定の日本の道100選に選ばれた。この付近の分線は谷崎潤一郎、渡辺淳一など多くの作家の小説の舞台になっている。分線沿いの桜並木は日本画家橋本関雪の夫人が大正期に植樹した。橋本の邸宅白沙村荘は分線が白川と交差する傍にあり、現在は**橋本関雪記念館**になっている。

分線近くの**金戒光明寺**、**真如堂**、**法然院**、**銀閣寺**など著名な寺院や白川との立体交差については、みやびな川編「白川」を参照いただきたい。ここでは、分線水を引いて**南禅寺界隈別荘庭園群**を設計・施工した作庭家小川治兵衛についてコラムで紹介しておく。

銀閣寺道まで北流した分線は西に転じ志賀越道まで今出川通を並流する。**志賀越道**は近江か

ら京の外周にある七口の一つ荒神口に通ずる歴史ある道である(七口は、地方からの街道の終着点として室町時代に関が設けられことに始まる。他に鞍馬口、大原口、栗田口などがある)。志賀越道までが京都市の上下水道局管理の疏水分線であり、流路長は3.2kmとなる。

分線はここから北上し、弧を描いて高野川東河川畔に至る同建設局管理の**第1疏水分線**となる。第1分線は志賀越道以北の北白川の閑静な邸宅街をしばらく流れる。西側には**京都大学吉田キャンパス北部構内**が広がる。21haの構内には、理学、農学関係の学部・大学院や附属研究機関の建物が並び農場もある。ノーベル物理学賞受賞の湯川秀樹博士が初代所長を務めた基礎物理学研究所もここにある。1952年竣工の**湯川記念館**は国内外の理論物理学の一大拠点となった。第1分線東側の北白川邸宅街には、スパニッシュ・ミッション様式とロマネスク様式を基調とし白壁が美しい1930年竣工の**京大人文科学研究所東アジア人文情報学研究センター**(旧本館)が建つ。貝塚茂樹、桑原武雄など著名な研究者を輩出している。

北上した第1分線は東山西麓に**京都造形芸術大学**を見ながら北西にカーブし、北大路通を越えて叡山電鉄をくぐる。叡山電鉄は京阪電鉄出町柳駅から京都北郊の八瀬・鞍馬へと観光客を運ぶ。1~2km北東には宮本武蔵の**一乗寺下がり松**や**修学院離宮**がある。さらに北西に進み、下賀茂神社の境外摂社である**賀茂波爾神社**(赤の宮神社)を右手に見ると**高野川**河畔である。

高野川右岸側にある**第2疏水分線**の始点には、急速ろ過池用洗浄水槽が屹立する**松ヶ崎浄水場**(1927年竣工)がある。蹴上浄水場に次ぐ歴史があり急速ろ過方式で250,000m³/dの処理能力があ



京大人文科学研究所
東アジア人文情報学研究センター



京都造形芸術大学



賀茂波爾神社



高野川と東岸の第1疏水分線水流出口



松ヶ崎浄水場



下鴨本通付近の第2疏水分線



洛北高校



京都府立大学

る。第2分線は、日本最古の中学を前身とする**洛北高校**近くを北端として円弧を描き**賀茂川**東岸へと至る。その周辺には**京都工芸繊維大学**、**京都ノートルダム女子大学**、**京都府立大学**が立地する。第1、第2分線の合計流路は3.7kmとなる。



第2疏水分線西端付近の賀茂川
遠方比叡山(左)と大文字山(右)

コラム① 作庭家 小川治兵衛

小川治兵衛は、江戸時代の宝暦年間(1751~63)から250年以上にわたり京都で植木・作庭業を営んできた「植治」の当主である。この名前は代々襲名され、現在は11代目に当たる。代々の当主の中でも、中興の祖と言われる7代目小川治兵衛・源之助(1860~1933)が有名で、現在の京都府長岡京市に生まれ養子として「植治」を継ぎ、「植治の庭」と呼ばれる近代的日本庭園作庭の先駆者となった。

日本庭園は、平安時代の寝殿造貴族邸宅の庭園や浄土宗の影響を受けた浄土式庭園、鎌倉・室町時代の禅宗の影響を受けた枯山水、室町時代の茶の湯文化と一体化した露地、江戸時代の大名屋敷の池泉回遊式庭園と、時代の歴史・文化を反映して変化してきた。「植治の庭」は池泉回遊式庭園様式を基礎に、東山借景等の自然景観と引き込んだ疏水の躍動感を組み合わせた自然主義的作風といわれ、明治以降の新興資本家の大邸宅庭園で花開いた。

主な作品に、山県有朋別邸無鄰菴、西園寺公望別邸清風荘、市田弥一郎(京呉服商)邸對龍山荘、平安神宮神苑、円山公園(以上、国定名勝指定庭園)、藤田小太郎(藤田組創始)邸洛翠荘、並河靖之(七宝家)邸(並河靖之七宝記念館)、稲畑勝太郎(染色家)邸などがある。なお、野村徳七(野村財閥創始)別邸碧雲荘は8代目小川治兵衛・保太郎(1882~1926)の、近衛文麿邸陽明文庫は9代目小川治兵衛・治郎(1912~44)の作品である。



〔野村別邸碧雲荘と疏水分線からの導水路〕

3 堀川 賀茂川河畔から二条城まで

堀川は平安京造営時に右京の西堀川とともに左京の東堀川として開削された。平安京の中心朱雀大路を境に、東寺・西寺、東市・西市など施設が左右対称に配されたのと同じである。その位置は、平安京の区画制度である条坊制で示すと、左右二坊南北道の堀川小路と西堀川小路である。堀川小路は現在の堀川通に一致するが、西堀川小路は現在の西大路通の少し東側を通る。西堀川の上流は現在の天神川上流を構成する紙屋川に対応する。平安時代には西堀川と西京極川(天神川)は別々に南北に流れていたと考えられている。

現在の堀川は賀茂川右岸の**紫明通東端**から始まる(行政管理上の上流端は賀茂川東岸の第2疏水分線流出端)。サイフォンにより導水された第2疏水分線水は東端でポンプアップされ、紫明通中央分離帯の並木の間にせせらぎ水路を形成し西行する。ここから二条城までの堀川は、1997年度より11年かけて実施された堀川水辺環境整備事業により親水空間に整備された。烏丸通との交差点北には**大谷大学**が立地する。同大学は江戸時代前期に浄土真宗東本願寺が創設した学寮を起源とし、仏教関係の貴重な書籍、経典、文化財の収集で有名である。

南西に流下した堀川は、堀川通の堀川紫明交差点より中央緑地帯を南下する。同交差点の西方1km弱のところに**船岡山**(112m)がある。船岡山は平安京大内裏の北に位置し、平安京造営時に南北軸の朱雀大路の基準点となった。平安京は中国の風水思想で計画されたが、船岡山は風水思想にある四神の玄武に相当するとみなされた。応



第2疏水分線水が流れ出す
紫明通せせらぎ水路東端



大谷大学



船岡山北麓



建勲神社



大徳寺南門



紫式部・小野 篁墓所



堀川せせらぎ道



後花園天皇火葬塚



慈受院(薄雲御所)



宝鏡寺人形塚



百々橋礎石



裏千家今日庵

仁の乱(1467年)時、山頂に西軍の山城が築かれたため、付近一帯が西陣と呼ばれるようになった。現在の山頂には1869年創建の**建勲神社**(通称「けんくん」)があり、織田信長を祀りゆかりの宝物を収蔵している。船岡山北側には1325年創建で臨済宗大徳寺派大本山の**大徳寺**がある。15万m²以上の境内には、国宝の唐門、方丈などや20以上の塔頭寺院が並ぶ。

堀川通に戻ると、堀川紫明交差点北西の島津製作所の一角に**紫式部・小野 篁墓所**がある。紫式部は「源氏物語」の作者として著名だが、小野 篁は平安前期の公卿・参議で文人であり、小倉百人一首にも歌が収められている。夜な夜な東山六道珍皇寺の井戸から地獄へ降り、閻魔大王の裁判補佐役を務めていたという伝説がある。

交差点南東には**後花園天皇火葬塚**、水火天満宮、慈受院門跡、宝鏡寺などがある。後花園天皇は応仁の乱頃の天皇である。**水火天満宮**は923年創建で水難火難除けとして菅原道真を祀る。**慈受院門跡**は室町幕府四代將軍足利義持の正室により1428年に建立された。薄雲御所とも呼ばれる。臨済宗**宝鏡寺**は室町時代前期に光厳天皇の皇女が開山し、その後多くの皇女が入寺する尼門跡(市有形文化財)となった。御所から皇女に贈られた人形の保管で人形寺とも呼ばれる。宝鏡寺の南東角に遺されている**百々橋礎石**は、平安期からこの付近を流れていた「**小川**」に架かる橋の礎石である。応仁の乱の細川勝元(東軍)と山名宗全(西軍)による百々橋合戦は有名である。

この付近には茶道の家元表千家、裏千家邸宅ほかの建物が集まっている。堀川通に面して**茶道資料館**(裏千家)や**表千家会館**が建ち、一筋東の小川通には**裏千家今日庵**、**表千家不審庵**が並

ぶ。今日庵は生垣が美しく、不審庵は板塀が特徴の門構えである。

堀川は、堀川今出川交差点より南でせせらぎ水路を終え小河川の姿を現す。西陣の染色排水で極度に汚染され、その後降雨時以外水が流れなくなっていた堀川も、下水道整備と第2分線水の導水により清流となった。前述の整備事業によりコンクリート張り川底の改修、遊歩道・緑地の整備などが行われ、“山紫水明”の水辺環境がよみがえった。

交差点東には、保元の乱に敗れ讃岐に配流された崇徳上皇を祀る**白峯神宮**(1868(明治元)年創建)があり、奉納蹴鞠で有名である。南には**西陣織会館**があり「西陣」の碑が立つ。西陣はこの会館付近を中心に一辺約1.5kmの矩形状に広がる。平安期以来機織業の集積が進み、現在は高級絹織物西陣織業者460軒が並び3万人が働く。さらに南には若者に人気のある1007年創建の**清明神社**があり、藤原道長の時代に陰陽師として活躍した安倍清明を祀る。

堀川東岸の東堀川通には1961年まで市電堀川線が走っていた。堀川と交差する一条通には**一条辰橋**が架かる。橋自体は最近建造のものだが、「あの世」と「この世」をつなぐと言われるこの橋には、源頼光四天王の渡辺綱の鬼女伝説を始め多くの伝承がある。その南の中立売通に架かる1873年竣工の**堀川第一橋**は真円の石造りアーチ橋で、御所と二条城を結ぶ公儀橋の歴史を継ぐ永久橋としての価値から、土木学会より選奨土木遺産に認定されている。下立売通には第一橋の翌年建造の石造りアーチ**堀川第二橋**(南北拡幅橋の間にある)もあり、“鶴の橋”、“亀の橋”と並び称される。この付近300m東には**京都府庁**がある。



表千家不審庵



白峯神宮



西陣織会館



西陣の碑



清明神社



安倍清明公像



一条辰橋



堀川第一橋



二条城



平安京大極殿跡

堀川の開渠南端には21万m²の面積を有する**二条城**がある。二条城は1603年に徳川家康により築城され、江戸時代における徳川幕府の京の拠点となった。天守は焼失して現存しない。幕末には十五代將軍慶喜が二の丸御殿黒書院で大政奉還を行った。二条城全体は世界遺産に、二の丸御殿6棟は国宝、入口の東大手門、二の丸御殿入口唐門、本丸御殿など多数の建物が重文にそれぞれ指定されている。二条城北西端より500m北西には**平安京大内裏跡**が広がる。暗渠を合わせた堀川の全流路は約11kmである。

コラム② 平安京大内裏と寝殿

平安京は桓武天皇により794年に長岡京から遷都された。形状は唐の長安や洛陽を模し、東西約4.5km、南北約5.2kmの規模だった。風水思想の「四神=山川道澤」に合った地形で、船岡山または北山が玄武、鴨川が青竜、山陰道が白虎、巨椋池(現在は無い)が朱雀と概ね見なされている。

平安京の区画制度の条坊制により域内は東西道13大路、南北道11大路で区切られ、東西の列は条(一〜九条)、南北の列は坊(朱雀大路を中心に左京、右京に一〜四坊)と呼ばれた。区切られた一辺約550mの区画自体も坊と呼ばれた。中央北辺6坊分が大内裏(平安宮:東西約1.1km南北約1.4km)である。この区域周辺では東西南北の大路が倍の密度で走っている。国儀大礼が行われる朝堂院と大極殿が中心にあり、周りに宴会場の豊楽院、内裏(東西約170m南北約215m)、諸官庁が配された。

天皇が住む内裏の中心は公的行事が行われる紫宸殿であり、西に私的住居の清涼殿、北に後宮の七殿五舎が配された。「源氏

物語」に出てくる弘徽殿や桐壺と呼ばれた淑景舎がそれである。大内裏南には朱雀門、朱雀大路最南部には羅城門が建っていた。

天皇をはじめ当時の貴族の住居であった寝殿は固定的間仕切りがない夏向き仕様で、外部とは妻戸や格子で隔てられたが、内部では、固定された障子(現在の襖)、御簾や移動式の屏風、几帳などが仕切り用屏障具として使われた。主人夫妻が住む中心部の母屋と女房が住む周辺の廂が区別され、外周には賣子(うりこ)と言う濡れ縁が付いた。母屋の面積は100m²程度、廂の女房1人当りの面積は12m²程度で意外に狭い。



【現在の京都御所紫宸殿】

4 天神川・有栖川

天神川が里まで流れ下ったところに日蓮宗**光悦寺**がある。この寺は徳川家康から土地を拝領した本阿弥光悦が建てた草庵が始まりで、光悦の死後1656年に寺となった。光悦は江戸初期の文人で、陶芸、書、茶の湯と多くの芸術分野に秀でていた。そのため、この洛北**鷹峯**一帯は文化人、芸術家が集まる芸術村（光悦村）となった。その南には、光悦村にちなみ西陣織メーカーが1951年に建設した**しょうざん光悦芸術村**がある。天神川（紙屋川）が流れる10万㎡以上の庭園には北山杉と紀州石が配されている。さらに南下すると浄土宗の教育機関が前身の**佛教大学**がある。同大学は明治期にその前身が開設され、1949年に新制大学として出発した。日本初の仏教学部を有する。

流れが北大路通を過ぎると西側に金閣寺の木立が広がる。臨済宗相国寺派の**金閣寺**は正式名を鹿苑寺と言い、釈迦の初説法の地に因む開祖足利義満の法名に由来する。この地には鎌倉時



光悦寺紅葉のトンネル



しょうざん光悦芸術村庭園



金閣寺



立命館大学衣笠キャンパス



龍安寺石庭



北野天満宮付近の天神川（紙屋川）

代に公家の西園寺公経きんつねにより氏寺など北山第ていが建てられた。室町時代の1397年に、三代将軍義満が荒廃していた西園寺家の建物を、北山殿と言われる寺院・邸宅に蘇らせた。金閣はその舍利殿であり、一層目寝殿造、二層目武家造、三層目禅宗仏殿造と、異なる様式を組み合わせた構造を持つ。それぞれの層に釈迦如来像、観音菩薩像、仏舎利が安置され、金箔は二、三層に貼られている。金閣は義満が開花させた北山文化の代表的建物だったが、1950年に同寺の修行学僧の放火により国宝の建物・義満坐像が焼失した。この放火事件は三島由紀夫の「金閣寺」に詳しい。金閣はその後再建され、現在は寺全体が世界遺産になっている。

金閣寺から南西に延びる「**きぬかけの道**」沿いには、明治初期の西園寺公望きんもちの私塾をルーツとする**立命館大学衣笠キャンパス**（1900年創立）、

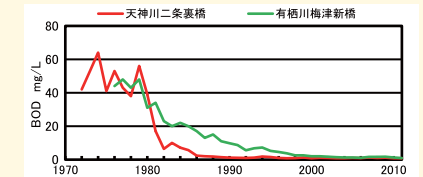
コラム③ 天神川・有栖川の水質

天神川中流部の二条裏橋および有栖川下流部の梅津新橋における、有機汚濁指標BODの年度平均値の長期変化を図に示す。いずれも1970年代は40mg/Lを超える強汚濁状態だったが、天神川では80年代前半から急激に減少し、80年代後半以降は2mg/L以下となった。有栖川でも80年代前半から減少が始まるが、減少の程度は天神川に比べ緩やかであり、2000年代以降になって2mg/L以下となった。

河川水質汚濁に対する主要な対策である下水道整備は、京都市の場合1970年代後半から促進され、平安建都1200年に当たる1994年には市街化区域の整備が概成された。両河川流域はどちらも鳥羽処理場（鳥羽水環境保全センター：1939年供用開始）の処理区に属する。下水道整備効果の表れ方

の違いは管渠整備の時期や流域特性の違いによると考えられる。

本シリーズみやびな川編の河川水質コラムでは、これまで白川、鴨川、琵琶湖疏水のBODの長期変化が紹介された。この中で琵琶湖の水質の影響が強い疏水を除けば、白川、鴨川と今回の2河川の変動パターンは概ね類似しており、市内における下水道整備の進展状況をよく反映している。これらの河川のBOD長期変動を見比べるのも一興である。



天神川中流部および有栖川下流部におけるBOD年度平均値の長期変動

世界遺産に登録された石庭の**龍安寺**(臨済宗妙心寺派:1450年創建)や御室桜で有名な**仁和寺**(真言宗御室派総本山:888年創建)がある。

北野天満宮の西を流れる天神川は、かつてこの付近まで**紙屋川**だった。名称は、平安時代に朝廷などで使用する紙を製造する紙屋院が付近に置かれたことに由来する。947年創建の**北野天満宮**は平安時代前期に大宰府へ左遷された菅原道真を祀る。道真死後の多くの異変を祟りと恐れた朝廷による建立で、国宝北野天神縁起がある。西側の**平野神社**は平安遷都時に建立され、平城京の地主神が遷座された。

北野天満宮付近に残る**御土居**は、1591年に豊臣秀吉により造られた高さ約5mの土塁の一部である。平安京を囲む形で全長約22kmにわたり構築された。京の防衛や紙屋川、賀茂川の洪水対策のためと言われている。妙心寺の学寮が前身の**花園大学**付近で南西に転じた天神川はその後**御室川**を合わせ、西京極総合運動公園方面へと南下する。御室川下流には「徒然草」の吉田兼好が麓に住んだ**双ヶ岡**(110m)が横たわる。天神川の流路長は約14kmである。

有栖川は山間部を流下後嵯峨野に至り大覚寺境内を流れる。876年創建で真言宗大覚寺派大本山の**大覚寺**は平安初期、嵯峨天皇の離宮だった。南北朝分裂のもとを作った亀山法皇が鎌倉時代に院政を行ったので、嵯峨御所とも呼ばれる。中央にある寝殿造の**宸殿**は重文である。東側の**大沢池**は嵯峨天皇の頃からのもので、秋に船を浮かべる「観月の夕べ」が催される。北側の**名古曾滝跡**は百人一首藤原公任の歌で有名である。約800m東にあり渡来系豪族の秦氏が溜池として造成したとも言われる**広沢池**とともに、大沢池はこ



天満宮の額

北野天満宮



平野神社



御土居



双ヶ岡遠望



大覚寺付近の有栖川



大覚寺宸殿



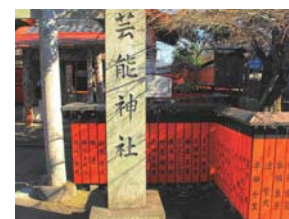
広沢池



大沢池



車折神社



芸能神社

の地の重要な景観を形成している。

有栖川下流にある**車折神社**は平安末期の寺を起源とする。その名は、鎌倉時代の後嵯峨天皇嵐山遊行の時に牛車の轆が折れ、神威を恐れた天皇が「**車折大明神**」の名を送ったことに由来する。平安期の舟遊びを再現した5月の三船祭が有名である。境内には著名芸人も参る**芸能神社**がある。有栖川の流路長は6.7kmである。

コラム④ 源氏物語と嵯峨野

紫式部によって書かれた世界的古典文学の源氏物語は54帖からなり、約100万字の文字量、300人余りの登場人物、約70年間の物語展開と桁外れの内容を持つ長編恋愛小説である。成立時期は、紫式部日記に記述が出てくる1008年頃の平安中期藤原道長の時代である。

嵯峨野に関係する巻として、10帖「賢木」には光源氏が六条御息所と別れを惜しむ野宮が登場し、野宮神社がイメージされる。17帖「絵合」には光源氏が後生を願うために嵯峨の山里に御堂を造営したとあり、18帖「松風」、34帖「若菜上」にもこの御堂が出てくる。これは大覚寺南西の清涼寺とみなされている。「松風」には大覚寺も登場する。また、同じ巻では明石の君が明石から移り住んだ山荘が大堰川(桂川)の傍にある。「若菜上」では出家を決意した朱雀院が造営した「西山なる御寺」が登場し、仁和寺とみなされている。

このように源氏物語では、北山、須磨・明

石、宇治などとともに、物語を展開させる洛中以外の重要な場所として嵯峨野が登場している。よく知られているように、平安中期以降、平安京右京は紙屋川、天神川、桂川などの氾濫で荒廃し、邸宅など居住区域は左京に移動していった。洛西に位置する嵯峨野ではその様相はさらに強かったと考えられる。源氏物語時代の嵯峨野には、人がほとんど住まない原野の山際に寺院が点在する風景が広がっていたのである。



【明石の君が移り住んだ山荘付近の桂川】